

と く
徳

ほ う
朋

思い通りにならない自分

ながかわ こうざぶろう
中川 皓三郎



ながかわ こうざぶろう

1943-2020

大阪府出身。元大谷大学短期大学部教授。元帯広大谷短期大学学長。

私は親鸞聖人の教えに縁を持つまでは、不安と劣等感で、いつも心にぽっかりと穴があいたような空虚感くうきょかんがありました。自分ではなかなか解決できず、こんなことなら生きているより死んだ方がましだと思っていました。不安の理由は、自分に力がないからだと思っていたのです。だから力のある者になれば不安から解放されると思い、力ある者になろうと努力し頑張ったんですがだめで、いよいよ不安の問題は解けなかったんです。ところが親鸞聖人の教えに触れてみますと、私たち自身が何よりも確かなものだと考え、それによって生きている「私」というものが、不安を生み出す根っこにあるものだという事に気付かされるのです。なぜなら私たちはいつも自分と自分でないものを区別している。そしてその上で自分の思いにかなうものは、よしとして喜べる。反対に思いにかなわないものは、悪しとして喜べない。だから共に生きるという事が、自分の思いにかなう限りにおいて、ということになっているのです。そのことが不安というものの根っこにあるものなんです。

要するに私たちは共に生きている者であり、必ず死んでいく者なんだという事を忘れてしまったら、生きている事が確かなものにならないという事です。

お互いに歳を重ねるなかで、不安というか心配になることがありますね。痴呆ちほうになったり、

寝たきりになったらどうしよう。できることなら、そうなるちょっと手前で終わらせてほしい。ただ今ではない。そんな都合のいいことを考えても、どうにもならないから、歳を重ねることを喜べないのです。みなさんどうですか。毎年毎年新しい年を迎えて、ああ今年もまた歳をとる、結構なことだ。こんなふうには誰も思わず、だんだん暗くなる。それは思い通りにこの人生を生きようとしていることの^{あらわ}顯れなんです。つまり、思い通りにならない自分が、いよいよ^{あらわ}顯れてくるから暗いわけです。だから自分の思い通りになる人生ではないことをはっきりと知ることによって、たとえ寝たきりになっても、その自分を見捨てないで生きていきたい。また、お互いに歳を重ねるなかで、お世話しなければならないということになっても、その人を見捨てないで生きていきたい、と。そのような生き方を実はミヒヤエル・エンデは、愛する者になりたい、それが人の一番欲していることだと言うのです。私たちのところで言えば、浄土に生まれて浄土の^{せい}生を生きるものになりたい、ということなのです。

（『生きるとは』）

今回のお話は自分の望む条件でしか現実を受け取れない私たちの姿を教えてください。ただ本当に望んでいる事はそんなことではなくて、どんな現実であろうとその現実をしっかりと受け入れていきたいという事だと思いました。（哲弘 拝）



この「^{とくほう}徳朋」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。

